

火炎瓶から遠く離れて

太原正裕

大学院の学生から最近、北関東のある大学で学生が運動を起こし大学側に種々の要求を突きつけ、認めさせたという話を聞いた。要求と言っても、学生食堂の充実、校内の電灯の増加など、いわば待遇改善にかかわるものだそうである。かつての安保闘争から過激な活動へとつながった昭和四十年代の学生運動のような政治色はないが、珍しいなと思った。

日本を含め、ベトナム和平など世界各地で学生運動がおきた時代は、平成のこの世ではもはや歴史の領域になろうとしつつある。サラリーマンから大学教員に転じて十年余年が過ぎた。その間、学生が変わったかと問われることもあるが、この十余年では、あまり変化がない、というのが本音である。学生運動どころか、部活動サークルへ参加する学生は私が学生であった三十年前に比べて激減。特に応援部のリーダーなどは、各大学で消滅しつつある。少子化、核家族化の影響か集団で何かをし、その集団に上下関係があるというのが、苦手なようである。学生には、「大学の四年間は人生でも重要な期間である」とたびたび説いているが、友人と本音で語り合い、裸でぶつかりあい互いを磨くというのがかつての学生像とすれば、まったく異なった世界がここにはある。政治運動どころか、社会に関心が薄く、ユーロ危機もタイの洪水も、消費税増税の議論、TPP問題などを講義で取り上げても、まったく他人事のような顔をしている。

しかし問題はその学生たちが、不真面目かというと決してそうではない、ということである。今の学生は講義にはほとんど出席し、休んだ時には欠席届を出す。通常の講義以外でも就職ガイダンス、簿記の検定試験用の特別補講なども真面目に出ている。一般には、学生を取り巻く就職環境が厳しいからと言われているが、就職に備えるならまずは前に述べたような、時事問題や社会問題に対して敏感になる、「知ろうとする」姿勢をみせることが大切であると思うが、その傾向は少ない。未知のものに対する好奇心も少ない。事実、就職活動で疲れきる学生もいるが、就職がなかなか決まらなくても、泰然自若としている学生の方が多い。あてがったものを覚えればよい、知らないのは教えないそちらが悪い、という教育を小学校から十数年受けているため、何が問題かを見つけない、問題企画能力を養うという大学本来の役割が機能しない状態である。森鷗外の話をして「教科書に出ていなかった」と言われて終わりである。熱い文学論なども、

無縁の世界である。学生は真面目なのに、大学における高等教育が機能していない、読書もしないというのはどういうことであろうか。諸外国、特にフランスやチリなどは若者に仕事の機会を増やせ、と現在でも学生のデモが行われている。日本の学生には、そのような悲壮感が見受けられず、サッカーのなでしこジャパンが優勝すれば、スポーツバーに押しかけて日本をネタに朝まで祝盃をあげ、インターネットなど新しいメディアを巧みに使い、AKB48などの手の届く距離にいるようなアイドルに熱を上げている。安全地帯にいてのほほんと過ごしているようにしか見えない。ごく身近なことにしか感心がない。また、大学を卒業してからも就職後すぐ辞めてしまう、うつ病と診断書を提出し休職しているのに本人は海外旅行に行っているなどの問題が多発している。

欧米人の目にはこのような状態は当然奇異に映るらしく、アメリカ人やドイツ人の講師から「ワーキングプアの増加、就職難、高齢化による将来の負担増など、不幸な状況が見えているのに日本の若者はなぜ運動を起こさないのか」という質問を度々受ける。また、「日本は老人がパワーを持ちすぎ、若者の機会を奪っているのではないか」とも言われる。教壇に立つものとして、学生の将来、そして大げさに言えば日本の将来のために頑張つて欲しいと、なだめたりすかしたり、おだてたり叱つたりしているが、効果のほどは上がっているとは言いがたい。そのような時に、『絶望の国の幸福な若者たち』という二十六歳の若手研究者が書いた本に出会った。著者の古市憲寿は、アメリカ人ジャーナリストから「なぜ、日本の若者は立ち上がらずじつとしているのか」という問いに即座に、「それは、日本の若者が幸福だからです」と答えたという。確かに北アフリカ、中近東諸国のような大規模デモも内戦もなく、虐殺も戦争も起きそうにない。就職できなくてもアルバイトでつなげば、餓死もしない。四十歳未満の独身者の七割以上は親と同居しているという統計からも衣食住に不自由はない。親の世代は、高度成長の恩恵を受けた世代でもあり、子供を住ませる余裕くらいはある。東日本大震災の時も多くの学生ボランティアが駆けつけたように、有事には活躍する意欲もある。半生を振り返り、また残りの人生を考え直す中高年と違い、時間（寿命）は永遠にあると思える世代である。

「ゆとり教育のなせる業」という論も多いが、そもそも「立ち上がる」理由が見当たらないのである。集団行動を大切にす理由も見当たらず、すべてが手に入る時代、先駆者たる年長者を立てる理由もわからないので、上下関係のある組織を嫌う。暴走族すら、

人手不足で次々解散している時代である。泰然自若とするわけである。

教育、という言葉を使ったが、教育とは決して美しいものではない。ダーティーなものである。戦時中は皇軍兵士、天皇の赤子となるべく軍国教育を行った。ドイツではヒットラー・ユーゲントとなるのが少年たちの憧れであったように、成績の良い生徒は陸軍幼年学校などへ進学を勧められた。戦後は高度経済成長の担い手たる経済戦士にするため、過度な競争に巻き込み鍛え上げた。この団塊の世代は、他方おだてられもした。高度成長時代の消費の担い手、お得意様だったからである。その結果かどうか、偏差値至上主義に陥り高偏差値無教養、傲慢なだけ、という人が増えてしまった。すると次は、ゆとり教育で、創造性をもった、「ゆるやかな個人主義」を持った人材育てようとしたところ、近視眼的な私生活主義者、権利主義者が増えてしまった。しかし、ゆとりにより縛りがなくなると、才能を持った伸びる人間はすぐく伸びる、という現象も起きている。わかりやすい例はスポーツ界であろう。古市はこのような教育を若者を「都合の良い協力者」にするためのものと断じている。その通りである。女子高生をJKと名づけ、消費のお得様になってもらっている。教育を施しているのも、若者にモノを売っているのも、若者から見たら「大人」である。

今の高校2年生以上は、ゆとり教育を受けていた学年である。しかし彼らには、ゆとり教育を受ける受けないの選択肢はなかったのである。ゆとり教育以上に、若者があるときは都合の良い協力者とし、ある時は消費のお客様にしたてあげたのも大人である。その大人たちが彼らの目の前で展開しているのは、責任を果たさず、他者のせいにする醜い姿である。オリンパス事件を代表に大人が悪いお手本を示す時代である。現在の評判の芳しくない政権の中核にもかつて、火炎瓶を投げていた方々多い。その方々も決して良いロールモデルではない。「想定外だから仕方がない」と大災害や原子力発電所を推進していた責任すら誰もとらない。

かつてリルケは「若者から、戦争、貧困、大きな思想との戦いを奪ってしまった。若者は死に方を考えなくて良くなった。これからは生き方を考える時代だ」と書いた。例えば自分たちが未成年で選挙権のない時代に、これだけ原子力発電所が増えたことに對して、若者は怒る権利がある。生き方をどうするか、大人に問う権利がある。

しかしながら、それを必ず阻止する勢力がある。親である。ゆとり教育のしわ寄せは当然、進学塾にまず来る。ここで適切な進路指導をしないと、すぐ親から苦情が来る。

大学受験に力を入れている高校、いわゆる進学校では、国語の授業で詩の味わい方などを教えていると生徒から苦情が来て、親も同調するというのである。詩とは理解するものではなく、陶醉するものだ、などと言おうものなら教師失格とされてしまう。親の世代は戦後世代であり、旧制高校で教養教育を受けた者はもういない。旧制高校など行かれなかった者も、情報源は読書、芝居、落語、講談などの文化の香りのするものから自然と教養を身につけていた。

大学、とくに都市部にある大学は少子化による受験生集めのために、キャンパスに高層ビルを建てるなど多額の投資をしている。学生に聞くと「あんな立派なもの建てるなら、学費を安くして欲しい」と言う。しかし、火災瓶闘争もしなければ、バリケードストライキもしない。大人の事情を見透かしているからだ。

山本夏彦は、「最近の若い者は、というが歳をとれば利口になるなら日本のような高齢化社会は利口ばかりのはずであるが、実態はその逆ではないか」と論じた。学生を立ち上げらなくさせたのは、大人の方であり、加害者は大人なのである。「このままでは日本の将来が危うい」というのなら、為政者を含めて加害者たる大人がなんらかの責任をとる必要がある。

冒頭に書いたある大学での学生の運動も、もう一度よく聞いてみたら実は学生がそういう行動を起こしていると聞いた父母が数人大学当局に事情を聞きに行ったところ、あっさり要求が通ったというのが実情だそうである。

今、日本で必要とされているのは、おじさん達が大好きな「若者論」ではなくこういうご都合主義の大人に若者を巻き込まないための真の「大人論」なのではないか。